

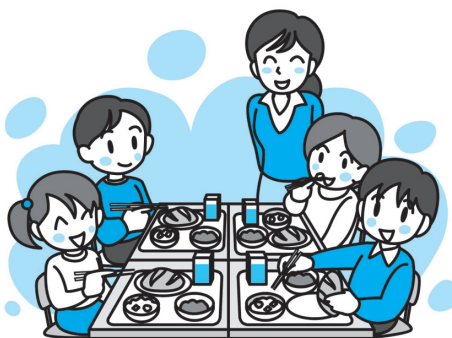
悩まなくてもだいじょうぶ



知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子

イラスト／清水直子



第19回

担任の先生の理解がポイント

アレルギー対応「自分がより理解深める必要」

「母の会」は、専門医に学校まで出向いてもらい、アレルギー児の支援を促す研修の橋渡しを行なっています。今回は2年間に21校で行なった研修に参加してくれた先生たち約千人のアンケート結果からご報告します。その中で「なるほど」と思ったことがあります。学校でのアレルギー対応を進める上で、どの職種の人からより理解を深める必要があると思うかを聞いた設問で、教諭以外の職種の方々が「自分以外」を挙げたのに対し、教諭は教諭自身と養護教諭と回答したのです。意識が高いと思われていた養護の先生だけでなく、担任になる先生が「自らがより理解を

深める必要がある」と考えていることが明らかになりました。

このことは、専門医が行なった調査で、学校での発症の第一発見者が本人以外では担任が39.5%と最も多く、主な対応者も養護教諭が53.8%、次に担任が34.9%であったことと関係すると思います。考えてみれば、例えば食物アレルギーの対応では、校長など管理職は主に対応の方針を決め、養護の先生は誤食事故などが発生した時の対応の中心を担います。一方で、食物アレルギーの子どもと最も長く一緒に時間を過ごすのは担任の先生です。配慮が必要な給食の時間にも担任の先生は一人で対応します。受け取った除去食や代替食の確認と配膳、給食当番の配慮、「お代わり」の時に誤



そのべ・まりこ ● 神奈川県社会福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』（南江堂刊）。

食が起きないかなど、担任の先生はきめ細かい対応を求められています。ところが現実には、担任となる先生方の研修機会が少ないのが実態で、アンケートはそうした先生方の思いを反映していると思います。

公的な信頼情報を手に話し合いを進めよう

そのことを裏返せば、学校でのわが子のアレルギー対応を求める上では、担任となる先生にまずアレルギーの病気や必要な対応を理解してもらうことが大切になります。そのために、例えば（独）環境再生保全機構のホームページ「ぜん息などの情報館」* などが公的な信頼情報を得て、保護者自身が進んで理解を深め話し合うことが大事だと思います。

*「ぜん息などの情報館」 <https://www.erca.go.jp/asthma2/>